

グリーン・トピックス

No.45

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 森林研究本部 林業試験場

河畔林の巨人、オオバヤナギ(トカチャナギ)

－丸木舟にも、まな板にも、シマフクロウのすみかにも－

旭川や帯広周辺など、扇状地河川にしばしば群生するオオバヤナギ(最近の分類では標準和名をトカチャナギと改め、ヤナギ属に統合)は、河畔林の主とも呼ぶべき、その姿がひとときわ目立つ巨木になるヤナギです(写真－1)。その名のとおり葉は大きく、材が赤みを帯びることからアカヤナギとも呼ばれていました。成木は樹高25m、直径1m以上になることもあり、アイヌはその材を丸木舟(チブ:写真－2)に最良のヤナギ(スス)として、チブニススと呼びました。現在は高級まな板の材料として利用されていますが、残念なことに林業関係者の間でも、葉の形が似ているバッコヤナギと間違われて流通しています(写真－3)。大雪山麓で見たオオバヤナギの切株(写真－4)は直径60cm弱で約120年の年輪がありましたが、バッコヤナギはこのような長寿になることはまずなく、大木になる前に腐れが入ってしまいます。

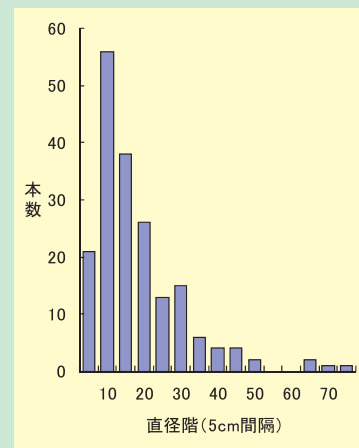
オオバヤナギは洪水による攪乱依存種で、若木は氾濫原に一斉林を形成しますが、上記のような大木にまでなれる個体はわずかです。私たちが暑寒別岳山麓の河川で200本あまりの成木を調査したところ、直径50cmを越える個体は数本しかありませんでした(図－1)。これらは動物が利用する樹洞候補木としても重要です。北海道の絶滅危惧種として有名なシマフクロウは、営巣するために直径80cm以上の大木が必要とされ、国後島の調査ではそのほとんどがオオバヤナギでした。魚食性のシマフクロウが生息する河畔でこのような巨木になる樹種は、ほかにハルニレやミズナラ、ドロノキなど限られたものだけなので、生物多様性のひとつの指標ともなるヤナギと考えられます。

(機能グループ)

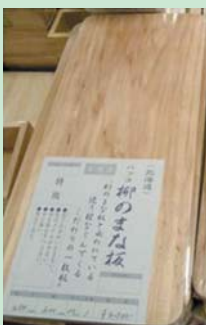


写真－1 オオバヤナギ大木(中央)

このような自然の氾濫原が生育地として必要。ひとときわ抜き出た大木は、オオワシやオジロワシなどの止まり木になり、樹洞ができればフクロウ類の営巣木にもなりうる。



図－1 天然林における直径階別本数
(恵岱別川上流2.5km区間)
直径50cmを越える大木は少ない。



写真－3 オオバヤナギのまな板
(バッコヤナギとして流通)



写真－2 丸木舟(北海道開拓記念館蔵:材はカツラ)
オオバヤナギの舟は現存せず、これについてカツラは舟造りによい木とされた。河畔林の代表樹種であるハルニレやヤチダモも使われたが、これらは重くて操船しにくいという。また、ドロノキは長持ちせず、10年位しか乗れないといわれる。



写真－4 オオバヤナギ切株
(樹齢約120年、スケールの折り尺は20cm)